

野上彌生子の『青鞥』時代

——ソーニャ・コヴァレフスカヤとの出会い——

佐々木 亜紀子

はじめに

野上彌生子は『明暗』を書いて夏目漱石に批評を乞い「落第」^{法①}したが、明治四〇年二月に漱石の推薦文を載いて『縁』を『ホトトギス』に掲載し、文壇デビューを果たした。そののち五年余りの間、『ホトトギス』を中心に作品を発表していたが、この安住の場から離れ他誌へと発表の場を移している。その発表の場の一つが『青鞥』である。『青鞥』研究において周縁的作家ととらえられている彌生子であるが、本論では逆に彌生子にとって『青鞥』とは何だったのかを考察していく。『ホトトギス』に書くために一旦封印した『明暗』の可能性は、『青鞥』と関わることでどのように発現したか。あるいは『青鞥』と関わることで、『ホトトギス』から離脱することとがどうつながるのか。彌生子が『青鞥』に作品を発表した大正元年九月から五年二月（『青鞥』終刊）までの三年半を、野上彌生子のへ『青鞥』時代と名づけ、その背離と親和の内実をさぐりたい。

一、「青鞨」創刊の頃

明治四十四年九月に「青鞨」が創刊されたとき、「社員」^{注②}の欄に「野上八重子」の名が見える。だが翌月の「編集室」欄には「又此度社員野上八重子氏にはよんどころない御事情の下に一時退社なさる事となりました。真箇に私共幾重にも残念には存じますが何分余儀ない御事情故。尚御作は時々頂けるさうで御座います」と退社が報告されている。この編集後記の後半、特に「真箇に私共幾重にも残念には存じます」をこのまま受け取ってよいものなのか、判断に迷うところだが、入社に関して双方にいくつかの齟齬があったのは確かだろう。「御作は時々頂ける」との約束もどの程度確かなものだったかは不明だが、彌生子は一年後まで作品を掲載していない。

『青鞨』創刊当時、彌生子が『青鞨』をどのように理解していたかという問題をここでは翻訳『鳥の讚美（レオバルデイ）』を取り上げて考えてみたい。『青鞨』創刊号に「二号予告」として「鳥の讚美（譚訳） 野上八重子」とあるが、結局この作品は『青鞨』に掲載されることはなく、三ヵ月後『ホトトギス』（明治四四・一二）に掲載された。その経緯については「ホトトギス」「青鞨」両誌共に説明はなく、彌生子も語っていないが、入社に関する『青鞨』との齟齬が主な原因で、掲載誌が変更されたと考えてよいだろう。この『鳥の讚美』は「孤独の哲学者エミリウス」が鳥の歓喜やその能力について書いたという内容の翻訳で、「女流文学の發達を計」という『青鞨』の方針に合致してはいない。当時の彌生子は、『青鞨』の方向性をみることなく、そこに掲載する作品も『ホトトギス』と交換可能だと認識していたのだろう。瀬沼茂樹に語った彌生子のことを借りれば、「女性には男より執筆の場が乏しいから、それをひろめる場」^{注④}と単に『青鞨』を理解していたと考えられる。

しかしながら、『青鞨』創刊から一年経った大正元年九月、彌生子は『青鞨』（第二卷九号）に「京之助の居睡」を掲載し、そののちは第二卷十号・十一号・十二号・第三卷一号に「近代人の告白」（翻訳）、第三卷十一号・十二号・第四卷一

号・二号・三号・五号・六号・七号・八号・九号・第五卷一号（附録）・二号に「ソーニャ・コヴァレフスカヤ」（翻訳）、第四巻四号に「新らしき命」、第四巻五号に「ねえ、赤さま」、第五巻八号に「私信」、第六巻二号に「色々なこと」を掲載している。つまり「京之助の居睡」を掲載したのち、終刊まで二十八回刊行された「青鞥」に、実に二十回作品を掲載しているのである。この掲載回数は同時期の他の社員に比べても決して少なくない。創刊時賛助員に名のあつた他の女性作家より顕著な活躍とさえといえる。当時彌生子が第二子を出産し、実父の死に立ち会うという時期にあつたことや、「青鞥」以外にも十種以上の新聞・雑誌に作品を掲載していたことを思い合わせると、彌生子が心ならず「青鞥」に関わつたと考えるべきだろ。彌生子のなかで、「青鞥」創刊当時と、その一年後からの「青鞥」時代とにいくらか変化があつたと考へるべきだろ。

二、「青鞥小説集」の頃

「青鞥」創刊から一年経って掲載された「京之助の居睡」は、四ヵ月後「青鞥小説集」に採録された。このことについて江種満子は「青鞥小説集」を「闘う女性言説を結集したアンソロジー」だと恣意的な評価を加えたうえで、「なぜこの作なのか、編集する側は理解に苦しんだのではなからうか」と述べている。この憶測が正しいならば、「青鞥」は彌生子の作品掲載を望んでいなかったことになり、それならばなぜそれ以後二十回も「青鞥」に彌生子の作品を載せたかという説明がつかない。むしろ「青鞥」もまた無邪気に彌生子作品を載せ、少しは知名度のある彌生子作品を故意に集の最初に据えたとも考へられる。

もちろん現在読み返すと、彌生子の作品が「青鞥」という場に対する異質感を含んでいることは否めない。たとえば「京之助の居睡」の主人公が男であることは、圧倒的に女主人公ばかりが登場する「青鞥」作品の中ですでに異質である。

『青鞥』への批判を表明するために故意になじまない作品を寄稿したという可能性もあるが、やはり『青鞥』の方向性に無頓着だったと考えるのが自然だろう。だが彌生子がこれ以降も変わらず『青鞥』から学ぶことなく、そのあり方に無自覚であつたとは言いい切れない。

『京之助の居睡』を掲載した翌月から、彌生子は『青鞥』に四度続けて（第二卷十号、第三卷一号）ミュッセの翻訳『近代人の告白』を掲載した。ミュッセ自身とゾルジュ・サンドとの熱烈な恋愛に材をとつた著名な小説であるが、掲載された内容は全体の一割程度に過ぎない。全五部構成注⑥の小説中の第一部の第一、三章と第四章の途中までで終つてゐるのである。『青鞥』はこの翻訳が掲載された理由にも中途で掲載が終つた理由にも触れていないので、ことの経緯は明らかではない。彌生子自身にその理由をさがせば、ブルフィンチの『伝説の時代』の翻訳も始めるうちに、『近代人の告白』に対する興味が失われて翻訳が続かなかつたことが可能性として考えられる。だが自分の作品が、『青鞥』の新しい路線とは明らかに質を異にしていると気づき、寄稿を取りやめた可能性もあろう。なぜならそのころ『青鞥』はらいてうが『円窓より——女としての樋口一葉』（二卷十号）を書き、尾竹紅吉が『青鞥』を去り、伊藤野枝がに参加し始めた時期であり、加えてへ新しい女」と揶揄するジャーナリストへの対抗姿勢を『青鞥』が打ち出した時期でもあるからだ。

三、「青鞥」との背離

『近代人の告白』を掲載した同じ月に、彌生子は『婦人記者の下婢生活』を『婦人画報』（大正元・一一―一二）に掲載している。これも結局ほんの一部の掲載で終わってしまった翻訳だが、次のような興味深い序文から始まる。

是はエリザベス、エル、バンクスと云ふ米国の婦人記者が、英国へ観光に渡つて、種々の世態人情と云ふやうなものを

女流新聞記者らしい眼で觀察してゐますうちに、若い女、殊に少し教育を受けた若い女たちが、自由とか獨立とか云ふ言葉を口癖のやうに唱導して、裁縫女や事務員を志望するのに反して下婢、小間使ひの如き家事的用人になるのを一種の屈辱のやうに感じて嫌厭する傾向の著しいのを目撃して（中略）下婢や小間使ひとして住み込んで見た実験記であります。

「自由とか獨立とか云ふ言葉を口癖のやうに唱導」する「少し教育を受けた若い女たち」ということばの端々に批判は多分に表われている。「婦人画報」の読者層を意識したためでもあろうが、この考え方と『青鞜』との距離は明白である。そこには助川徳是のいう「知識ある賢明な女性が良い女性であり、良い女性がつまりは良き母であり、良き妻であるといふ（中略）巖本善治や内村鑑三によって自己目的化された^{註①}明治女学校の教育による思想がはつきりと表われている。同月の『ホトトギス』（大正元・一一）に掲載した『私信』でも、彌生子は同様の思想を開陳している。それは明治女学校時代を話題にした書簡体のもので、内村鑑三の訓話を引用して、「内村先生は（中略）諸君もどうかラテン語の詩がよめると同時にパン焼きの名人になつてほしい、と云ふ事でその日のお話を結んだと覚えてゐます」と語っている。家政を奨励する思想は彌生子の『青鞜』時代が過ぎて、『職業的婦人と妻』（『女学世界』大正五年五月）などのなかに息づいていることは記憶すべきだろう。

そして大正二年一月の『指輪』（『中央公論』）では、「ラテン語の詩」を読むことと家政や育児の奨励とがセットになつて、「新しい女」へのあてこすりにさえなっている。

敏子は、文学好きな若い人達の中に、今では社交的の意味をさへ帯びて見逃されぬもの、様になつてゐる、新しい劇団の芝居をさへ何一つ見に行く気にもならなかつたのであります。松井須磨子の舞台顔もまだ知りませんでした。もと

より帝劇の女優といふ女達の貌を見るのも今宵が初めて、ありました。

語り手は家政と育児とに忙しい主人公敏子に寄り添うように、「文学好きな若い人達の間で社交的の意味をさへ帯び」つつ盛況になる観劇のあり方を蔑む。そしてノラやマグダを演じて「新しい女」の一人とされた松井須磨子のことを「初めから大した期待を持つてゐなかつたのだから、アクトレスと云ふ横文字の響きで連想するような、陰影の著しい芸術的気分の漂ふた貌をしてゐない事には何んにも失望はありませんでした」と切り捨て、別の女優の一人を「小間使」の「か・ね・に・そ・つ・く・り・だ・わ・ね・え」（傍点は原文による）と敏子に囁かせる。彌生子の特権的な美意識、あるいは貴族趣味の無意識の発現ともとれるが、別の側面からみれば、松井須磨子への容赦のない批判でもあろう。「青鞥」がノラとマグダの特集を組んで須磨子の談話までも載せたことを、一年以上経ってから冷めた調子で批判しているとも考えられる。^{注⑧}

また『新潮』（大正四・三）に発表された『洗礼の日』でも彌生子は「青鞥」を次のように批判的に描いている。

茂子がその人と知合になつたのは二三年この方の事でありませんが、その頃はS子はまだ信者でもなんでもありませんでした。一と群の若い女達が集まつて作つてゐた文学上の或団体の一人として、その方面に熱心な勉強を続けて行かうとしてゐた人でありました。けれども其内にその団体の重だつた人々の、凡てに大胆な且つ稍空想的に流れた行動は、彼女の反撥力はあるが飽くまで地道に自分の路を歩まう、パンの問題、職業の問題をも実際に解決して自分の責任としてか、つてゐる年とつた親達に或程度の満足と安心を与へなければならぬとあせつてゐた彼女とは、だん／＼調和がとれなくなりました。S子は失望と反感と侮蔑と同時に幾分かの羨望を交へた複雑な感情の下にその団体から別れました。

ここでは明らかに「青鞥」を指していると考えられる「文学上の或団体」の「重だつた人々」の行動を、「凡てに大胆

な且つ稍空想的」とはつきりと批判している。

以上のようにこの頃の彌生子作品には、「青鞥」の方向性に無自覚あるいは批判的なものがあり、彌生子の態度にも「青鞥」との背理がみられた。そして彌生子が関わったのは「青鞥」創刊一年後からなので、罵詈雑言を浴び、次第に力を失って、ついに終刊へと追込まれる頃の「青鞥」に敢えて関わることは、保身の意識が強い彌生子には労多くして得ることの少ない仕事だったであろう。しかしそれならばなぜ「青鞥」終刊まで作品を掲載し続けたのかという問題が残る。

四、「青鞥」への意思

先述したように、彌生子は同時期に「青鞥」以外で十種類以上の新聞・雑誌に作品を掲載しており、そのなかには女性を読み手と想定するいわゆる「婦人雑誌」^{注⑤}もあるので、「青鞥」に固執する意味は見出し難い。また安住の「ホトトギス」には作品を掲載しなくなっているものであるから、彌生子が手当たり次第に作品掲載の場を求めていたというのでもない。それならば残る可能性として、彌生子に「青鞥」と関わっていく意思があったとしか考えられない。確かに彌生子が「青鞥」の方向性に無頓着であったり、「青鞥」との間に互いに相容れぬものがあつたために彌生子の作品は「青鞥」のなかで違和感がある。だがともかくも「青鞥」と関わっていかうとする意思なくしては、彌生子の「青鞥」時代はなかつたろう。そしてその「青鞥」時代は、彌生子の「ホトトギス」離脱の時期と重なっていることに注目したい。

拙稿^{注⑥}ですでに論じたように、明治四〇年二月からの五年余りの期間、彌生子は「ホトトギス」の「歓迎」^{注⑦}する小説をかくのだが、「ホトトギス」以外の雑誌には「ホトトギス」から逸脱するものも書いていた。そして「写生文」をジャンルとしてではなく、スタイルとして認識するに至り、「ホトトギス」という安住の場からはなれていく。そのとき思い出されるのが、本論「はじめに」でふれた「明暗」である。漱石に「落第」とされた「明暗」ではあるが、中島国彦は「明暗」

には「光輝ある混沌が潜んでいる」あるいは「写生文の概念を内側から突き動かすエネルギーが秘められていた」^{注②}と論じた。拙稿では「画を生命画を良人にして生涯独身で居ると誓」う主人公幸子の造型にその「混沌」と「エネルギー」をみ、そのような主人公が漱石には「不自然」^{注③}に読めたとしても、「青鞥社概則」にいう「女流の天才」にも一脈通じ、日露戦後の日本にあり得べき人物造型であると論じた。「ホトトギス」に書くために一旦封印した「明暗」の可能性は、「青鞥」の「女流の天才」を謳う思想に誘発され、彌生子を「青鞥」へと導いたと考えられる。

先に「青鞥」批判として読んだ「洗礼に日」にも、「青鞥」とおほしき「或団体」とS子との別れを、「失望と反感と侮蔑と同時に幾分かの羨望を交へた複雑な感情の下に」と書き込んでおり、「青鞥」への屈折した感情が読み取れる。またほかに「青鞥」のなかでも熱情的で向上心に溢れた伊藤野枝への友愛には並々ならぬものがある。この二人の友情について、述べる余裕はないが、一つだけ同時期のものから例を出すと、「染井より」(「婦人画報」大正三・六)で、野枝を「Nさん」として次のように語っている。

N——と云ふ名前を書けばあなたも御存じでせう。例の社の重なる同人の一人なのです。新聞や雑誌などの勝手な、公平を欠いた筆で伝えられた彼女の面影が、あなたにい、印象を与へてゐるかどうかわかりませんが、私の目に映じた彼女は、正直で素朴で、真摯な向上心と、生一本な熱情を持つた可愛らしい人で御座います。

この「染井より」を掲載した雑誌は「青鞥」ではなく「婦人画報」であった。「青鞥」のジャーナリズムへの対応を批判的にみていたであろう彌生子はまた、ジャーナリズムの「青鞥」への対応をも「勝手な、公平を欠いた筆」として批判し、「婦人画報」の読者に、心をこめて野枝の素顔を紹介し、微力ながら誤解の修正を試みている。ここには「青鞥」に真摯なものを認めた痕跡がみられる。そして彌生子の「青鞥」への意思は、「ソーニャ・コヴァレフスカヤ」の翻訳掲載

に最もよく表われている。

五、「新しい人」・「新しい女」・「新しい婦人」

「青鞥」が「新しい女」と呼ばれたのは彌生子にも周知のことであつたろうが、彌生子は青鞥社の人々をのちのちまで「新しい婦人」あるいは「新婦人」と主によび、「新しい女」という語を故意に避けている。

たとえば大正三年に『読売新聞』に掲載された田村俊子の『暗い空』は、発表前に「社告」で「新らしき女の生活を描写せんとす（中略）吾が読売は改革の劈頭に於いて此の大作を讀者に提供し得るを矜とす」と喧伝された。このとき「新らしき女の生活」は拡大字体になつていたり傍点が施してあつたりし、新聞社がこのことばを強調する戦略をもつていたことが判る。だが彌生子はその戦略を無視するように、「新婦人を描くとかの事でしたから、その方面に対する期待を抱いてゐたのですが、今のところではその点は可なり失望しそふに」と述べる。明らかに「新しい女」という語を避け、敢えて「新婦人」としていることがわかる。それは彌生子の語感にそぐわないということもあるが、ジャーナリズムが揶揔的にあるいは扇情的に「新しい女」ということばを語ることに對する静かな抵抗にもなつてゐる。そして「新婦人」の小説に「期待を抱いて」いたところに、「新婦人」が求めるべき人間像として彌生子に理解されていたことが判る。

ところで「新しい女」を考える上で当然想起されるのは「新しい男」であるはずだが、明治四三年ごろから盛んにジャーナリズムをにぎわした「新しい女」ということばに比べて、「新しい男」が語られることは極端に少ない。管見では春雷子が「新男性の出現を待つ」といい、松崎天民が「新しい男がでてこなければ」というが、元来「新男性」「新しい男」ということば自体が定着をみなかったといえる。しかし「青鞥」創刊より三年早い明治四一年に発表された夏目漱石の『三四郎』では、与次郎が三四郎に「イブセンの人物に似てゐるのは里見の御嬢さん許ぢやない、今の一般の女性はみんな

な似てゐる。女性ばかりぢやない。苟しくも新らしい空氣に触れた男はみんなイブセンの人物に似た所がある。「無いとすれば、その中に生息してゐる動物は何所かに不足を感じる訳だ。イブセンの人物は、現代社会制度の陥欠を尤も明らかに感じたものだ。吾々も追々あ、成つて来る」と語つてゐる。へ新しい女へ新しい男」といふことばはないものの、「現代社会制度の陥欠を尤も明らかに感じた」人物として、美禰子と「今の一般の女性」と「新らしい空氣に触れた男」とを「イブセンの人物」に似てゐると与次郎に語らせたのは先見的である。

また明治四三年の森鷗外「青年」^{注⑥}にはへ新しい男へならぬ「新しい人」「新人」といふことばがある。それは「拊石」が演説で語る「兎に角イブセンは求める人であります。現代人であります。新しい人であります」といふ部分である。そしてこれを聞いた純一が、そのあとで大村と話す場面にも、「新しい人は詰まり道徳や宗教の理想なんぞに捕はれてゐない人なんでせうか。それとも何か別の物を有してゐる人なんでせうか」とあり、応えて大村が「消極的新人と積極的新人と、どつちが本当の新人かと云ふことになりますね」といふ。ここでもイブセンとの関わりのなかで「新しい人」が語られてゐる。

このように考えてくると、へ新しい女へが「ノラ」と絡めて語られたのは、坪内逍遙の講演（明治四二・七）や、「人形の家」興行のためばかりではなく、イブセンがその思想から「新しい人」と目されたせいでもあつたことが判る。また元を辿れば「新しい人」とは、新約聖書「エペソ人への書」^{注⑦}の「新しい人」でもあり、キリスト教徒の希求すべき人間像であつた。明治三三年七月から創刊されたキリスト教主義の雑誌「新人」はその聖句に基づく。この「新しい人」の定着の後に、へ新しい女へが盛んに使われるようになったといえよう。へ新しい女へもまた元來「非難語」^{注⑧}ではなかつた。だが「青鞥」創刊の一年後には所謂「五色の酒」「吉原登楼」などと、「青鞥」をスキヤンダラスに扱ふ過程で、「青鞥」と結びついて「非難や悪罵の要素」を盛られたこととなつたようである。

野上彌生子が「新しい婦人」といふとき、それは「非難語」としてのへ新しい女への差異を意図してゐた。へ新しい

女)ではなく、「新らしい空気に触れた」「新しい人」「新人」という理想的な希求すべき人間像というニュアンスを盛りつつ「女」である者を指して「新しい婦人」としたのである。むしろそれは自身を「新しい女」と宣言したらいてう(『中央公論』大正二・一)との背理の一面であり、保守性のまわりつく「婦人」ということばを受け入れている彌生子の古めかしさ一面でもある。だがのちには青鞥社の人々を指して「新しい婦人」としている。「新しい」「婦人」とは彌生子のなかの「青鞥」に対する親和と背離とを端的に表すといえよう。

六、「ソーニャ・コヴァレフスカヤ」翻訳の頃

彌生子が青鞥社の人々を指して「新しい婦人」というとき、しばしばソーニャ・コヴァレフスカヤとともに語られている。たとえば昭和八年の岩波文庫版『ソーニャ・コヴァレフスカヤ(自伝と追想)』の「序」では、ソーニャを「この先覚婦人」といい、彼女が体験した「ロシアの知識階級の旋風——光明と知識に対する解放運動」を「雑誌『青鞥』を中心とした当時の日本の新しい婦人たちの運動にやや似たものであった」と回想している。また昭和五三の岩波文庫改版『ソーニャ・コヴァレフスカヤ(自伝と追想)』の「序」には、この翻訳を発表した当時を回顧して「最初発表の場にしたのは『青鞥』であった。平塚さんの新しい婦人運動とともにあの雑誌もはじまったばかり」であったともある。

このソーニャ・コヴァレフスカヤ Kovaljevskaya, Sofiya (Sonya) ^{注②}とは、一八五〇年のモスクワに生まれた数学者である。十八歳でウラジミール・アヌーフレイウィッチ・コヴァレフスキーと偽装の結婚をしてロシアの家族制度から逃れることに成功したソーニャは、ドイツで数学を学び博士号を取得した。そののちロシアに帰ってコヴァレフスキーと本当の意味で結婚生活をし、一女をもうけたが夫の自殺によってその生活は破綻した。再びロシアを出て、三十三歳でストックホルム大学の講師となり、三十八歳でパリ・科学アカデミーより「定点のまわりの鋼体の回転についての研究」に対し

てポルダン賞を授与され、翌年スウェーデン・科学アカデミーからも賞を受けた。ソーニャは数学者としての才能ばかりでなく、文学的才能にも恵まれ、優れた文学作品も残したといわれている。

現在岩波文庫で読むことができる彌生子訳の『ソーニャ・コヴァレフスカヤ（自伝と追想）』は、ソーニャ自身による「ラエフスキ家の姉妹（ロシアでの生活）」（全十一章）という自伝部分と、ソーニャの友人アン・シャロット・エドグレン・レフラーによる「ソーニャ・コヴァレフスカヤ」（全十五章）という追想記とを合わせたものである。その内容のほとんどの初出が「青鞥」であった。

この「ソーニャ・コヴァレフスカヤ」の翻訳が掲載され始めたのは、「青鞥」での「近代人の告白」の翻訳掲載がほんのわずかで途切れ十ヶ月経ったのちであった。この十ヶ月の空白の意味は定かではない。その間に次男が生まれて多忙だったという可能性もあるが、他の雑誌には三作の作品を出し、単行本「伝説の時代」までも出版している。これらから考えると、先に述べたように、「近代人の告白」と「青鞥」との違和に気づき掲載を中止したものの、「青鞥」との距離を測りかねていた可能性もある。青鞥社が社則を変更し、婦人問題路線へと切り替えたのが大正三年一〇月で、「ソーニャ・コヴァレフスカヤ」の掲載が始まったのが翌月というのは興味深い。

翻訳のもとになった英訳本は「野上から与えられたもの」^{注⑤}であったとはいえ、訳出のほとんどを「青鞥」に掲載したのは、むしろ偶然ではあるまい。岩田ななつによれば、「ソーニャ・コヴァレフスカヤ」は「大正元年頃から文学青年の間で、かなりの感激をもつて読まれていた」^{注⑥}ので、その受け取られ方を知らなかったはずはなからう。元来ソーニャは「ブルー・ストッキング」^{注⑦}のひとりであるとの小林哥津の弁もある。また大正四年一月の「青鞥」に掲載された分には、「自分の最大な絶対的な義務は自分の天才を啓発することだと常に考え」ているというソーニャの手紙がある。このソーニャの「天才」ということを訳出することは、「女流の天才を生まむ事を目的」とする青鞥社の人々への賛同ともとれる。少なくとも彌生子は彌生子なりに「女流の天才」の可能性を信じていたといえよう。

以上のことから、「ソーニヤ・コヴァレフスカヤ」は、他の「婦人雑誌」ではなく、「青鞥」にこそふさわしいと彌生子は気づいていたと考えられる。「青鞥」創刊時や「青鞥小説集」のころとは違い、彌生子は「青鞥」の方向性に気づき、「ソーニヤ・コヴァレフスカヤ」を翻訳することで「青鞥」に寄り添っていくという意思をもつようになったのである。

七、「新しい婦人」の内実

「ソーニヤ・コヴァレフスカヤ」の翻訳と同時期に「青鞥」に発表した作品に「新しき生命」(「青鞥」では「新らしき生命」と「ねえ、赤さま」)がある。前者は彌生子の次男出産に材をとった小説で、後者は幼い長男が自然の営みに驚きをもって対する様子を描いた詩である。両者共に当時の自分の幼い息子たちに材をとったという点が共通する。

婦人問題路線に切り替えた「青鞥」が、数カ月後からいわゆる「貞操論争」「墮胎論争」「廢娼論争」を展開していくことを知っている現在の視点で読み返してみると、この二作ほど「青鞥」になじまない作品はなからうとさえ思われるが、「青鞥」の対応は違うようだ。前者は掲載される前月から「野上彌生さんが久しぶりで創作をおのせ下さる筈です」(四一三)と「予告」にも「編輯室より」にも特記してある上に、掲載号には「野上彌生さんが特に本号のため御書き下さったことを感謝いたします」(四一四)とある。社交事例でもあろうが、「青鞥」が彌生子の「創作」を掲載することに積極的だったと知られる。また「ねえ、赤さま」の掲載号「編輯室より」では「野上八重氏が今後の「青鞥」により以上の力を添へて下さる筈」と気配りをみせている。当時の「青鞥」が彌生子とどういう関係を持つようとしていたかを論ずる紙幅は残されていないが、少なくとも表面的には友好な状態であったことが伺える。そして彌生子もこの二作が「青鞥」となじまないと考えていなかったのだろう。なぜなら彌生子にとって「新しい婦人」とは、ソーニヤのように「自分の天才を啓発する」とともに、母たることも手放さない「婦人」であるからだ。「どうかラテン語の詩がよめると同時にパン焼き

の名人になつてほしい」(『私信』) という内村鑑三のメッセージはここにも響いている。

「新しい生命」では育児に専念せねばならない「疲労、束縛、犠牲をおつくうに感じる気」を払いのけて「これより意義深い仕事はない筈である」と母たることを神聖視し、生まれた子を「この小さい新人」とよんで尊ぶ。この思考は「ねえ、赤さま」はむろん、同時期に発表された『JUN PETT』(全集未収録)^注『私信』(『青鞥』大正四・九)「小さい兄弟」(『読売新聞』大正五・一・一、同・三・一七)などに一貫して流れている。『JUN PETT』では「此靈妙な小さい物を養ひ得るのを喜びます」と、母たることを謳歌する。『私信』では前月の野枝の『私信——野上彌生様へ——』への返答という体裁をとりながらも、墮胎論にふれる野枝を無視するように子供の様子を細かに述べ、子供と会話することが「この上もなく幸福に且つ光榮に思はれます」と語る。そしてわが子の「外界に対する好奇心と一種の自由を愛する心持ちから生ずる、幼年時代の放浪性」を慈しんで彼らを「Little vagabond」と名づける。このLittle vagabond という仇名は初出で「二人の小さなヴァガボンド」となっていた『小さい兄弟』に引き継がれる。ここでは長男の頭は「神秘の小さい庫」であり、次男は「小さい新人」である。

以上のような彌生子の思考は、助川が「子は(中略)母の神聖な崇拜の対象であり、従つてそれとの交渉はいわば祭祀に似ている」と指摘したとおりだ。それと同時にわが子にLittle vagabondと名づけて悦に入るスノビズムは、彌生子なりの「天才」志向の顕れであり、母であることを「幸福に且つ光榮に」思うナルシステックな向日性は、「元始、女性は大陽であつた」を彌生子流に解釈したひとつの形でもあつたらう。この意味で彌生子は「新しい生命」も「ねえ、赤さま」も「青鞥」にふさわしい作品と考えていたはずだ。生まれた子を「新人」とよぶのも、「非芸術的な厄介者として疎まし」(『JUN PETT』) がる負の要素から解き放ち、「神秘の小さい庫」をもつ「新しい人」として塗り替える意図がある。それは「新しい婦人」に託す夢にも通ずる。ゆえに「自分の最大な絶対的な義務は自分の天才を啓発することだと常に考え」ているというソーニヤの手紙を訳出することと、「赤さんは何を聞いても、黙つて笑つてゐるばかりだもの」

〔ねえ、赤さま〕と子供のことは書き写すこととは、彌生子のなかでは矛盾しないのだ。

こういう思想が家政と育児の奨励へと容易につながるのには、先に第三章でみてきたとおりだが、一方でソーニヤが恋愛に悩み、母たることを重荷に感じつつもその才能を伸張すべく生きたことへの共感ともなっていく。たとえば、岩波茂雄宛書簡（一九二四・一一・一七）では「偉大になればなるほど淋しく、高名になればなるほど愛から遠ざかったソーニヤの苦痛は正しく現代の最もすぐれた婦人たちの苦痛でありませう」とあり、「ソーニヤ・コヴァレフスカヤのこと」〔図書〕第三四八号、一九七八・八）では「フランス科学院で、ポアンカレから最高の名誉賞を与えられてさえ、彼女のほんとうの願いは、ただひとりの女として愛されたかつたのであつた。仕事か、愛か。社会か、家庭か。男とともに働くことがあたり前になっている今日においてさえ断ちきれない問題に、ソーニヤは先駆者として、またそれ故に運命的に悩まなければならなかつた」と記す。知性を重んずる彌生子が、数学の「天才」をもってソーニヤを敬愛したのはもちろんだが、その眼差しは成功にだけ向けられているのではなく、むしろ生き難い「ただひとりの女」としてのソーニヤにも向けられ、「現代の最もすぐれた婦人たち」へと思ひ至る。ここに彌生子のなりの『青鞥』からの学びがあつたといえよう。

女を讀者とする出版ジャーナリズムの活況は、女の書く場を準備し『青鞥』を生み出した。その波間の中で「野上から与えられた」『ソーニヤ・コヴァレフスカヤ』は、はしなくも彌生子が『青鞥』を学ぶ一歩となつた。そして『青鞥』との背理を包含しつつも、彌生子は「新しい婦人」という独自の足どりですれと関わつた。この歩みが野上彌生子の『青鞥』時代である。

兄の結婚によつて居場所を失うへ妹へ幸子の苦悩と、「画を生命画を良人にして将来独身で」いようとすする幸子の思いとを描いた『明暗』は、かつて漱石に「落第」とされた。だが学問のためには父権を核とする厳しい家族制度をのりこえて偽装の「理想結婚」さえ厭わず決行し、強い意志をもって自己の「天才の啓発」に邁進したソーニヤという「美にして聡明なる職業婦人」〔手帖〕との出会いによつて、伏流していた『明暗』の可能性は「新しい婦人」として湧きあがっ

たかにみえる。「新しい婦人」という発想はのちに「真知子」や「迷路」の女性群像につながっていくものでもあろう。「ホトトギス」という安住の場から離脱する飛翔力はこうして与えられた。

注

①「昔がたり」解説（昭和四七・一一）。引用は『野上彌生子全集』（岩波書店、一九八〇）『野上彌生子全集 第Ⅱ期』（岩波書店、一九八六）による。特に注がなければ以下同じ。ルビは適宜省いた。

②「青鞥」の引用は「複製版『青鞥』（不二出版、一九八二）による。傍点は引用者による。特に注がなければ、以下同じ。ただし「ソートニヤ・コヴァレフスカヤ」の名は表記に異同が多いため、注①全集の表記に統一した。

③この件について井出文字は「彼女は（中略）筆者に、自分は集団に拘束されるのが嫌いなのでと語った」（『青鞥』の女たち）海燕書房、一九七五）と述べている。また瀬沼茂樹は「青鞥」の話を私にはじめて伝へに来て加入を乞ふたのは、平塚さん自らではなく、木内鏡子さんです。目白の国文出で、立派に素養があり、能楽にもくはしく、鼓などたんのうでした。雑誌の発行は、女性には男より執筆の場が乏しいから、それをひろめる場を、女だけで拵えるところで、私も早速賛成した次第です。これが生田長江などのえらびとかで、「青鞥」の名になつたらしいのですが、御承知のとおり、当時のジャーナリズムにも乗せられ、それが遂行すべき本来のコースから逸脱するやうになつたので、私の書齋主義では同調されなくなつたのです」と「そのいささつについて」（『野上彌生子の世界』岩波書店、一九八四）直接返事を受けている。

④瀬沼茂樹『野上彌生子の世界』岩波書店、一九八四。

⑤「知としてのへ女」の発見——小説」（『青鞥』を読む）日本文学協会 新フェミニズム批評の会、學藝書林、一九九八。なお、『青鞥小説集』について江種が論じなかつた尾島菊の『老』や人見直の『教会と魔術と烏』、林千歳『乙弥と兄』なども、「闘う女性言説を結集したアンソロジー」にふさわしい小説とは言いがたい。「青鞥小説集」はらいてうが「はしがき」で述べた「青鞥」に載せた小説の中の或ものを集めたもの」という以上のもではなく、「闘う女性」などという確たる編集方針があつたとは考えられない。

⑥小松清訳『世紀児の告白（上・下）』（岩波文庫、一九五三）。

- ⑦「野上彌生子と大正期教養波」(桜楓社、昭和五九)。
- ⑧ただし「青鞥」の側では「指輪」を批判とは受け取っていないようだ。「指輪」は中村孤月によって酷評され(『読売新聞』大正二・一・一五)、綾川武治も「極めて外面的な浅いもの」(『帝国文学』大正二・一・二)と低く評価しているにもかかわらず、野枝によると思われる「青鞥」『編集室より』では、中村孤月に強く反論し、むしろ「指輪」を高く評価している。たとえば注⑤の江種満子は、「青鞥小説集」が「闘う女性言説を結集したアンソロジー」だと結論づけるなかで、彌生子の作品にそれとの違和をみる。だが「指輪」をめぐる対応をみるかぎり、「青鞥」は彌生子の冷めた批判や特権的な物言いに無批判であり気遣いさえみせている。それは野枝ひとりの問題であるかもしれないが、「青鞥」の思想は混沌のなかにあったともいえよう。
- ⑨「婦人雑誌」の名称は日本近代文学館編『日本近代文学大事典』(講談社、一九七七)による。
- ⑩「野上彌生子『明暗』の行方——漱石の批評を軸に——」(愛知淑徳大学国語国文 第二十二号)平成一一・三)および「野上彌生子の『ホトトギス』時代」(愛知淑徳大学国語国文 第二十三号)平成一一・三)。
- ⑪彌生子が文壇デビューを果たした「縁」は、「漱石氏来書」として夏目漱石の推薦文が添えられた。そこには「これ〔縁〕を指す：佐々木注」をたのものがつて「歓迎」するのは「ホト、ギス」丈だらうと思ひます」(引用は「漱石全集」岩波書店、一九九三。以下同じ)とある。
- ⑫「写生文を超えるもの——彌生子の処女作『明暗』と漱石」(『國文學』學燈社、昭和六三・六)。
- ⑬夏目漱石は「明暗」の幸子が画を志すことについて、「こんな心を起すには起す丈の原因がなければならん夫をか、なければ突然で不自然に聴える」と書簡で彌生子に忠告を与えた。
- ⑭ほかにも「彼女」(『中央公論』大正六・二)「野枝さんのこと」(『女性改造』大正二・一・二)に詳しい。「染井より」は注①全集で「染井より」。
- ⑮「俊子氏に就て描く私の幻影」(『中央公論』大正三・八)。
- ⑯「新女性」(『帝国文学』明治四五・七)。
- ⑰「女八人 その五」(『中央公論』大正二・二六)。
- ⑱引用は「鷗外全集 第六卷」(岩波書店、一九七二)。
- ⑲明治四三年の七月に坪内逍遙が大阪で「近世劇に見えたる新しき女」という題で講演をし、明治四五年三月にその講演が『所謂新しい女』として単行本化したとき、逍遙は「新しい女といふ名称は、今日では最早新しくはない。新聞紙上にも、世間の話頭にも、繰り返して用ひられてゐる」(引用は「逍遙選集 第八卷」第一書房、昭和五十二)と述べている。

⑳ほかに、明治四二年一月の「自由劇場第一回」という新しい試みで、小山内薫が青年たちに熱烈な受け取りをされたことも関わったかとも考えられる。イブセン受容については、中村都史子『日本のイブセン現象1906-1916年』（九州大学出版会、一九九七）を参照されたい。

㉑新約聖書「エペソ人への書」には、「汝ら誘惑の欲のために亡ぶべき前の動作に属ける旧き人を脱ぎすて、心の霊を新にし、真理より出づる義と聖とにて、神に象り造られたる新しき人を著るべきことなり」（引用は『旧新約聖書』日本聖書協会、一九八一）とある。

㉒堀場清子『青鞥の時代』（岩波新書、一九八八）。

㉓ワロンツォーフ著、三橋重男訳『コワレフスカヤの生涯 孤独な愛に生きる女流数学者』（東京図書出版、一九七五）、リン・M・オーセン著、吉村証子・牛島道子訳『数学史のなかの女性たち』（法政大学出版局、一九八七）、宮田親平『科学者の女性史 コワレフスカヤからマクリントックまで』（創知社、一九八五）を参照した。表記は『岩波西洋人名辞典 増補版』（岩波書店、一九八二）に従った。

㉔『青鞥』終刊後は、『トルストイ研究』（大正七・九）に続きが一部掲載され、岩波書店の単行本化（大正一三・一一）でようやく完訳となった。

㉕『ソーニヤ・コヴァレフスカヤ（自伝と追想）』「序」（岩波文庫改版、一九七八・六）。

㉖『青鞥』の翻訳作品』（『大妻女子大学大学院文学研究科論集 第六号』平成八・三）。岩田は野上豊一郎の講演、それに対する『文章世界』（大正元・一一）の批評、伊藤野枝の『動揺』（『青鞥』大正二・八）などを引用して手堅く論じている。

㉗『座談会「青鞥」の思い出』（『国文学 解釈と鑑賞』至文堂、昭和三八）。

㉘『野上彌生子全集』では小説に分類しているが、『青鞥』目次には「詩」とある。

㉙『野上彌生子全集』には未収録であるので、引用は初出誌『読売新聞』（大正三・四・四）による。

㉚注⑦に同じ。

㉛『ソーニヤ・コヴァレフスカヤ』の最初の完訳となった大正一三年の単行本の「序」で、「彼らは自分たちをロシアの伝統的の厳しい親権から解放させ、知識と光明に対する飢渴を満足させるために或る風変わりな方法を選んだ。それは誰かと条件付きの結婚をすることであった。名義だけの夫は、名義だけの妻を連れて外国へ出かける。そうして彼女をどこかの大学に入れてやる。ソーニヤもこの理想結婚をした一人であった」と彌生子は述べている。

付記

本稿の一部は、日本社会文学会中部ブロック研究会（一九九八・七）及び日本文学協会第19回研究発表大会（一九九九・七）での口頭発表をもとに、その後考察を加えたことをお断り致します。

（本学非常勤講師）